

01 へら鮒の特徴と習性

魚の特徴や習性を知るとは、へら鮒釣りをするためには重要なポイントになります。釣りをする前に、へら鮒とはどんな魚なのか知っておきましょう。



へら鮒とは

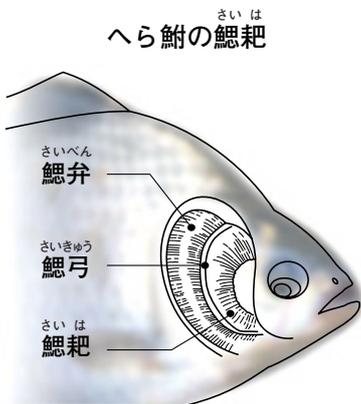
へら鮒は、琵琶湖や淀川水系で植物性プランクトンを主食として生息してきたゲンゴロウブナを、関西の養魚家が食用魚として飼育し、採肉量の多い魚を選別して改良を重ねてきた結果、作り出された魚です。ですから「へら鮒」という名は正式な魚の名称ではなく、ゲンゴロウブナの別称ということになります。呼び名の由来はいくつかありますが、魚体の体高が高く扁平していて篋(へら)に似ていることから、一般的に「へら鮒」と呼ばれるようになりました。



へら鮒の特徴は

へら鮒の外形的な特徴は、他のフナ類には例のないひし形に近い肩(上頭部)の盛り上がりです。また、へら鮒は成長が早いのも特徴のひとつ。2~3年で約30cmまでに成長します。俗に「マブナ」と呼ばれるキンブナ、ゲンブナでは、その大きさに成長するまで5年以上かかります。

体を覆うウロコは整然と並んでいて全体的に銀白色をしています。この色は生息する環境によって異なります。



さいは
へら鮒の鰓耙

フナ類の鰓耙数

種類	鰓耙数
キンブナ	36~40
ナガフナ	45~53
ギンブナ	45~57
ニゴロブナ	53~63
へらブナ	106~120

へら鮒は主食である植物性のプランクトンを食べる時、水も一緒に吸い込みます。その際、水だけをろ過するふるいの役目をしているのが鰓耙(さいは)です。マブナと比べ、へら鮒の鰓耙はその食性から発達していて、マブナの2倍以上です。



へら鮒の習性は

へら鮒は、物音や水温の変化に非常に敏感で、警戒心の強い臆病な魚です。このため、単独で生活していることはまずありません。たえず群で泳ぎ、同じような大きさの魚がある程度の群れをなして行動しています。

へら鮒は非常に敏感ですから、わずかな音が水中に伝わるだけであつというまにその場から逃げてしまいます。ですから、釣りを始めるときはなるべく静かに準備することが必要です。

また、昨日釣れたからといって次の日も釣れるとは限りません。へら鮒は体温を調節する能力がなく、外界の温度とともに体温が変化する変温動物で、加えて水中でバランスを保つための浮き袋があるため、気温や気圧の変化で過ごしやすい場所に移動してしまうからです。



へら鮎の12ヵ月

3~5月

春になると日照時間も長くなり、深場でじっとしていたへら鮎も徐々に回遊し始めます。この時期のことを「巣離れ」といい、また、暖かさが増して産卵期に近くなると、へら鮎は卵を産み付けることのできる藻や水草のある岸近くの浅場に群れでやってきます。これが「乗っ込み」です。この時期のへら鮎は警戒心が薄く、野釣りでは大量のへら鮎を釣ることができたり、1年の中で最も大型のへら鮎を釣ることのできるチャンスでもあるのです。

6~8月

夏は強い日差しを受けて水中の植物による光合成が盛んになるために酸素が豊富に供給され、加えて水温が高いのでへら鮎の活性は高くなり、エサを積極的に食べるようになります。しかし、猛暑が続いたりすると湯水気味になって水質が悪くなるため、場所によってはへら鮎の活性が下がることもあります。

9~11月

秋になって水温が下がり始めると、へら鮎は冬に備えて再びエサをたくさん食べるようになります。しかし秋は朝晩の気温の差がはげしいので、日によって、または時間帯によってへら鮎のタナ（泳層）が頻繁に変化します。

12~2月

気温が著しく下がる冬になると、変温動物のへら鮎は水温変化の少ない池の底や最深部、または沈下物やオダ周りでじっと春を待ちます。体温の低下したへら鮎は極端に食欲も落ち、4℃がエサを食べる限界水温とされていますが、氷が張るほどの状況でも2~3日水温が安定すると、食いは悪いながらもへら鮎はエサを食べるようになります。

このように、へら鮎はとても気難しい習性を持っている魚ですから、自然の川や湖沼といった野釣り場では、たくさん釣れたりオデコ（釣果なし）で終わったり、その時の気温や気圧、天候などで釣果に大きな差が出てきます。

